學界展望

西暦十三世紀の小アジア

井谷鋼造

小アジア（アナトリア）半島はアジアの西端に位置し、古來幾多の民族の支配下にあったが、最終的にこの地の主となったのは現在のトルコ共和國を形成するトルコ人である。彼らは西暦十一世紀以來、小アジア（當時はルーム Rūm 地方と呼ばれていた）に流入し、この地を住地として數世紀を經た後、アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸に跨る世界的な大帝國オスマーン朝國家をうちたてた輝かしい過去を持つ。オスマーン朝國家は西暦一四五三年にコンスタンティノープルを攻略し、ビザンツ帝國を滅ぼして以來、その華々しい活動の舞臺をバルカン半島の側に移してしまったと言われるが、小アジアがその後もオスマーン帝國において樞要の位置を占めたことは Rūm-eli（オスマーン帝國のバルカン半島側領域）と Anadolu（小アジア側）が並び稱された如く今世紀に到るまで變らなかった。すなわち小アジアは十一世紀末より現在に到るまで彼の地に居住したトルコ人にとって祖國となった土地であり、現在のトルコ共和國に連なるオスマーン朝を初めとするトルコ人國家が生れ、育った地域である。それとともに小アジアの地は、地圖を見れば明らかなように、その北は黑海、南は地中海に面し、西はバルカン半島に接し、東はアルメニア、グルジアからアゼルバイジャン地方に連なり、東南はシリアと上メソポタミア（al-Jazīra 地方）に到り、アジアとヨーロッパ、コーカサスとメソポタミアをつなぐ接點となっている。東西を結ぶ交通路が幾本も小アジアを通過し、こうした事情で小アジアは世界史上の諸事件の數々に遭遇することとなった。古くはアケメネス朝ペルシャとギリシャの戰役やアレクサンダー大王の東方遠征から、中世の十字軍運動、モンゴル人の西征、あるいはティムールの遠征など、どれも小アジアを通過して、あるいは舞臺として行なわれたものである。こうして小アジアの地は世界史とも深くかかわる地域であることが理解されよう。

西暦十一世紀末以來、十四世紀初めにアナトリアの邊境でオスマーン朝國家が產聲を上げるまでの二百年以上の期間小アジアの主要部はセルジューク朝のスルターン（ルーム・セルジューク朝）の統治下にあった。このセルジューク朝のスルターン政權①（ルーム・サルタナト Salṭanat-i Rūm）は現在のトルコの最も古い直接の祖先と呼べるであろう。從來、我國の學界では十一世紀末以來オスマーン朝創建に到る小アジアの歷史に關する研究は皆無といってよい。僅かに三橋冨治男氏の文獻紹介のための一篇の論文「小アジア（ルーム）＝セルジューク朝史研究のための本原史料と傍證史料」（千葉大學文理學部紀要文化科學篇第二輯、一九六〇）を見出すのみである。本稿では小アジアのセルジューク朝國家の歷史を概觀した上でヨーロッパおよびトルコにおける諸研究を紹介し、併せて筆者自身の展望を記しておきたい。西暦十三世紀という時代を選んだのは小アジアのセルジューク朝國家に關る史料の多くがこの世紀以降に書かれたことの他に、小アジアのトルコ人の歷史という觀點からも、また廣く世界史的な觀點からもこの時代がとりわけ重要であると考

えられるからである。

I

西暦十世紀後半以來、西アジアのイスラーム世界の中心地バグダードはシーア派を奉ずるダイラム人のブワイフ朝の統治の下にあったが、十一世紀後半に到り、東方より Ṭoghrïl Beg に率いられたセルジューク朝の軍隊がイランを經て侵攻し、一〇五五年にはバグダードに入城してこの町を再びスンナ派の手に取り戻した。セルジューク朝はトグルル・ベグを繼いだ Alp Arslan のもとに大帝國を形成し、エジプトのファーティマ朝とイスラーム世界を二分する形勢を現出した。トルコではこのセルジューク朝を大セルジューク Büyük Selçuklular と呼ぶ。セルジューク朝の英主アルプ・アルスランは小アジアに遠征して一〇七一年東部アナトリアのマラズギルド（Malāzgird=Manzikert）でビザンツ帝國の軍隊を撃破し、時のビザンツ皇帝ロマヌス・ディオゲネス（Armānus）を虜とする大勝利を得た。この事件を契機に小アジアへ大量のトルコ人（トルコマン）が流入した。そしてマラズギルドの勝利から十年を經た一〇八一年にはビザンツ帝國の都コンスタンティノープルに程近いニケーアの町が Sulaymān bin Qutalmïsh の手中にあった。この人物こそルームのスルターンたちの祖である。そしてイスラーム教徒によるニケーアの攻略はビザンツ帝國に脅威を與え、この事件が一因となってビザンツ皇帝の要請により西歐に十字軍が組織されたことは史上有名である。スライマーンの父 Qutalmïsh[2] は大セルジューク朝の初代スルターン・トグルル・ベグの從兄弟にあたる。クタルムシュの父 Isrā'īl はトグルル・ベグの父 Mīkā'īl の兄で、別名を Yabgu Arslan と言い、ガズナ朝のスルターン・マフムードに捕えられ、獄死したという。クタルムシュもまたアルプ・アルスランに背いて一〇六四年にイランの Rayy 近郊でアルプ・アルスランと戰い、Gird-kūh への敗走途中、羊小舍で絶命したという。[3] クタルムシュの子スライマーンはセルジューク帝國の名高い宰相 Nizām al-Mulk の執成で助命され、アルプ・アルスランの跡を繼いだスルターン Malik shāh によって小アジアへ送られた。そして十年足らずの間にスライマーンはビザンツ領小アジアを東から西へ横斷し、コンスタンティノープルを目前にしたニケーアの町に現れたのであった。

スライマーンの成功の要因は、單にビザンツ側の弱體化という事實だけでなく、セルジューク朝と何らかの關係をもったトルコマンが十一世紀前半以來ほとんど絶え間なく小アジアへ ghazāt（略奪のための遠征）を行ない、小アジア内陸部へトルコ人が浸透しつつあったという事實に求められよう。M. H. Yinanç は *Türkiye Tarihi—Selçuklular Devri I. Anadolu'nun fethi*, Istanbul, 1944 の中で、一〇一五—一六年セルジューク朝の Chaghrī Beg—トグルル・ベグの兄弟でアルプ・アルスランの父—の指揮下、東部アナトリアへの ghazāt が行なわれたことを述べている。また Yinanç によれば、小アジアへはスライマーンの他に、後になってそれぞれ侯國（imārat）を建てることになる Artuq Beg や amīr Dānishmand が相次いで侵入した。このうちダーニシュマンドは中部アナトリアに國家を建設し、セルジューク朝のルーム・スルターンと勢力を拮抗させるまでになった。スライマーンはその後、アレッポをめぐってマリク・シャーの弟 Tutush と戰い、戰死した（一〇八

六)。スライマーンの子 Qilich Arslan は人質としてマリク・シャーの許へ送られ、成立間もないルーム・サルタナトはその主を失った。マリク・シャーの死後(一〇九二)クルチ・アルスランは解放されて小アジアへ戻った。しかし一〇九七年小アジアに上陸した第一回十字軍によってニケーアは占領され、Dorylaem (トルコ名 Eski Şehir) の戰いに敗れたルーム・サルタナトの都はコニヤ (Konya=Qūniya) へ移った。そしてクルチ・アルスランもまたユーフラテス河支流の Khābūr 河畔でマリク・シャーの子 Muḥammad の軍と戰い、敗死した(一一〇七)。スライマーンといい、クルチ・アルスランといい、國家草創の時期に二度までもその君主を大セルジューク朝との戰いで失ったことはルーム・サルタナトに大きな影響を與えずにはおかなかった。

クルチ・アルスランの死後三年を經て、子の Shāhanshāh がスルターン位に卽いたが、三年後ダーニシュマンド朝の後押しを受けた弟の Mas'ūd に位を奪われた。Mas'ūd は一一一六年から一一一五年まで位に在って國家の基礎を固め、西でビザンツ帝國と、東でダーニシュマンド朝と爭った。Mas'ūd を繼いだ Qilich Arslan II 世は一一七六年 Myriocephalum における戰いでビザンツ皇帝マヌエル・コムネノスの軍を破り、ビザンツ帝國の小アジア回復の希望を完全に打ち碎く一方、一一七八年にはマラトヤ (Malatya=Malaṭiya) を占領してダーニシュマンド朝を滅ぼし、小アジアのムスリム・トルコ人のチャンピオンとしての地位を確立した。しかし、一一八六年、年老いたクルチ・アルスランが九人の息子と二人の弟と甥に自らの領土を分配するや、彼らの間でスルターン位の繼承をめぐって激しい爭いが起り、小アジアの各地にセルジューク朝の王子たちが割據する中、一一九〇年には神聖ローマ皇帝フリードリヒ・バルバロッサ率いる十字軍が首都コニヤに侵入する事件さえ發生した。一一九二年にクルチ・アルスランII世が死ぬと、十一人の王族の間でスルターン位をめぐる爭いは激しさを加えた。結局一二〇四年までに王族の一人である Rukn al-Dīn Sulaymān Shāh がサルタナトの統一を回復したが、この人物はすぐに死に、その跡をクルチ・アルスランII世の末子 Ghiyāth al-Dīn Kay-khosrow が繼いだ。このスルターンに續く三代の期間ルーム・サルタナトは最も安定し、繁榮した時期を迎える。カイホスロウは大セルジューク朝の歷史を記した史書 *Raḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr* が著者 Rāwandi によって獻呈されたスルターンである。すなわちイラン、イラクにはもはやセルジューク朝の君主は居らず、今やセルジュークの血統を繼ぐものはルームのスルターンのみとなったのである。カイホスロウの跡を繼いだ 'Izz al-Dīn Kay-kāwus (1211—1220) と 'Alā' al-Dīn Kay-qubād (1220—1237) は共に有能なスルターンであり、この二人の時代にルーム・サルタナトの國勢は大いに伸長した。とりわけカイクバードの治世には國家はめざましい發展を遂げた。カイクバード時代セルジューク朝國家はモンゴル軍に迫われてアゼルバイジャンに現れたホラズムシャー Jalāl al-Dīn Mengübirti を一二三〇年エルズィンジャン (Erzincan=Arzinjān) 近郊の Yassi Chaman で敗退させて東部アナトリアの Akhlāṭ まで進出し、さらに黑海を渡ってクリミア半島の Sughdaq まで軍を送った。後世のオスマーン朝の史料 'Ashiqpāshā-zāda の Tawārikh-i Āl-i 'Uthmān においてスルターン 'Alā' al-Dīn は傳說的な名君として語られているように、カイクバードの榮譽は後世まで語り繼

がれた。トルコの史家 Osman Turan は 'Alā' al-Dīn Kay-qubād の治世を ikbal devri（「繁榮期」）と呼んでいる。しかし、一二三七年カイクバードが沒して息子の Ghiyāth al-Dīn Kay-khosrow Ⅱ世がスルターンに卽位するとルーム・サルタナトには停滯と弱體化が現れた。一二四〇年 khawārij の Bābāy による宗教的な反亂がアナトリアの東南部に發生し、多くのトルコマンがこの反亂に參加した（Bābā Isḥāq の反亂）。[4] ルーム・サルタナトはフランク人の力を借りてこの反亂を鎭壓したが、一二四二年にはモンゴル人がエルズルム（Erzurum=Arzan al-Rūm）に侵攻し、翌一二四三年スルターン・カイホスロウⅡ世の軍は Köse Dagh において Bayju Noyan 率いるモンゴル軍の前に潰走し、モンゴル軍がスィヴァス（Sivas=Siwās）とカイセリ（Kayseri=Qayṣarīya）を征服するという事態に到った。冬の訪れと共にモンゴル軍がアゼルバイジャンの牧地へ歸還する際、ルームの宰相（ṣāḥib）Muhadhdhab al-Dīn はバイジュ・ノヤンに同行し、Mughān の牧地でモンゴル人に對して il となり（すなわち服屬し）毎年貢物を獻上することを約した。一二四三年のモンゴル人の侵入の結果ルーム・サルタナトはモンゴル帝國に服屬する地位に甘んじなければならなかった。そしてこの時點から半世紀餘を經てルーム・サルタナトはモンゴル人に對する屬國の地位のまま史上から姿を消した。

以上述べてきたように十三世紀の小アジアはその前半がカイクバードに代表される安定と繁榮の時期であったのに對し、モンゴル人の侵入という未曾有の大變動を蒙ったその後半はルーム・サルタナトにとって衰退と零落の時代であったといえよう。モンゴル人の侵攻以後王朝の滅亡までのルーム・サルタナトの歷史については次節で最近の研究動向を紹介しつつ觸れてみたい。

II

西暦十三世紀の小アジアに關してはこの時代が「オスマーン朝前史」と考えられることから、從來オスマーン朝史に關する概說の類において少しく觸れられてきた。しかし、十三世紀の小アジア、セルジューク朝期のルーム（小アジア）の歷史に關する專著としては筆者の知る限り、次の三冊を擧げられるのみである。

1) Claude Cahen, *Pre-Ottoman Turkey*, London & New York, 1968.

2) Osman Turan, *Selçuklular Zamanında Türkiye*, İstanbul, 1971.

3) В. А. Гордлевский, *Государство Селджукидов Малой Азии*, Москва-Ленинград 1941.[5]

1)の *Pre-Ottoman Turkey* はその名の通りオスマーン朝以前の小アジアの文化と歷史に關する概說（general survey）であり、序論の他四部に分れる。第一部は大セルジューク帝國、第二部は一二四三年までの小アジア、第三部はモンゴル侵入前の小アジアにおける社會と制度、第四部はモンゴル時代の小アジアを扱っている。この本の特徵は中世の西アジア史全般について廣い學識をもつ著者カーエンによる小アジアの社會と文化についての豐富で詳細な記述を含んでいる點にある。カーエンはペルシャ語、アラブ語の他、アルメニア語、シリア語、ビザンツ帝國の史料などにも言及しており、その博識ぶりには脫帽せざるを得ない。ただ政治史に關しては稍雜然とした印象を拭えず、いくつかの誤解や誤りを含んでいる。

たとえばルームのスルターン‘Alā' al-Dīn Kay-qubād とアイユーブ朝の Malik al-Ashraf が連合してホラズムシャー Jalāl al-Dīn を撃破した Yassi Chaman の戰いの行なわれた年月を一二三一年七月としたり（p.130 實際は一二三〇年八月）ルームのスルターン、カイホスロウⅡ世が Köse Dagh の戰いでモンゴル軍を前にあえなく敗走してルーム・サルタナトがモンゴル人に服屬するようになった後 Ṣayin Khān バトゥ大王の許へ派遣された Shams al-Dīn Iṣfahānī という人物がバトゥからルーム地方における ḥākim（太守）の地位を與えられたという史料の記述をルームにおけるバトゥの代理としてスルターン、カイホスロウが任命されたという風に讀み違えている（p.269）。モンゴル時代以降の小アジアの歴史に關してカーエンが最も注意を拂っている點は十三世紀小アジアに流入したトルコマンについての問題である。カーエンは *Pre-Ottoman Turkey* の第四部中、「トルコマン諸侯國の形成」「種族的展開」(ethnic evolution) の二節でこの問題を説明する他 "Notes pour l'histoire de Turcomans d'Asie Mineure au XIIIe siècle" *Journal Asiatique* 239 (1951); "Questions d'histoire de la Province de Kastamonu au XIIIe siècle" *Selçuklular Araştırmaları Dergisi* III (1971) などの論文を發表した。十三世紀の小アジアのトルコマンについては彼らが十三世紀末以來小アジアの各地に beylik（「侯國」）を建て、割據した事實から後世との關連において最も關心のもたれるテーマである。

トルコ共和國の史家オスマン・トゥランの手になる2)の *Selçuklular Zamanında Türkiye* は永く Anadolu Selçuklular（ルーム・サルタナト）研究に携わってきたトゥランの政治史研究の集大成とも言うべき著作である。全篇七百頁を越す大著で「アルプ・アルスランからオスマン・ガーズィーまで」二百五十年近い小アジア史を縷述したものである。*Pre-Ottoman Turkey* と違って、各頁に入念な脚註を附し、その參考文獻の中には未だ公刊されていない寫本類を含み、完成度の高い研究書であるといえる。ただ敢えて難點と思われるのは膨大な史料を驅使して歴史的事實の檢證にあたるの餘りに稍統一的な觀點に缺ける嫌のあることと、「トルコ人」の歴史という視點から、たとえばアルメニア人のトルコ人に對する從屬といった問題を必要以上に強調しすぎることである。トゥランはセルジューク朝期の小アジアを中心に *İslam Ansiklopedisi*（イスラーム百科辭典のトルコ語版）に多くの記事を執筆する一方、ルーム・サルタナトに關する史料の公刊⑥と多方面にわたる研究論文の發表を行なった。中でも重要であると思われるのはセルジューク朝期のワクフに關する一連の研究⑦を發表していることである。この研究は現存するワクフ文書の詳細な檢討を基礎にしたもので、現地の學者ならではの成果である。トゥランは他にルーム・サルタナトの土地法や金融に關する論文⑧も發表しており、經濟史的側面における關心の廣さが窺える。

ソ連邦の歴史學者、文獻學者 B. A. ゴルドレフスキー（一八七六—一九五六）の3) *Государство Селджукидов Малой Азии* は獨ソ戰のさなかに刊行されたものであるが、當時としてはトルコの M. H. Yinanç や M. Fuad Köprülü の研究を踏まえた比類のない研究書であった。全體は序説の他、十七章に分けられ、小アジアのセルジューク朝國家の政治、社會、文化の各分野にわたる研究が收められている。中でも筆者が最も多くの頁をさいて論じている

のは小アジアにおける「封建制度」の問題である。この中で述べられている iqṭāʿ は西暦十世紀以來の西アジア社會を特徴附ける最も大きな要素の一つと考えられるが、小アジアにおけるイクターの問題がゴルドレフスキーの研究書において取り上げられた意義は決して小さくない。

一九七一年は一〇七一年に行なわれたマラズギルドの戰いから數えて九百年目に當たるため、それを記念してトルコ共和國では一九七〇年前後にセルジューク朝全般に關する多くの研究が發表された。上に述べたオスマン・トゥランの「セルジューク朝期のトルコ」もその一つである。一九六六年には E. Bilgiç, M. A. Köymen, M. Önder, F. Sümer らによって Selçuklu Tarih ve Medeniyeti Enstitüsü「セルジューク朝歴史・文明研究所」がアンカラに創設され、一九六九年から研究誌として *Selçuklu Araştırmaları Dergisi* が發刊され始めた。この研究誌の第一巻の巻頭を飾ったのは Faruk Sümer の "Anadolu'da Moğollar" である。この論文は百四十七頁もある長大なものであるが、内容は非常に充實している。それはカーエンやトゥランの著書が編年誌的に諸事件を羅列し、内容的なまとまりに缺けるのに對して、Sümer の論文は「アナトリアのモンゴル人」というテーマを軸に一つの統一的な視點の下に諸事件に言及している點にあると思われる。スュメルはこの論文の中で小アジアに到來したモンゴル人がいかなる部族の出身であったかを詳細に分析した後、彼らの定着過程を述べている。しかしこの論文の前半の内容の中心はむしろモンゴル侵入後のルーム・サルタナトの歴史とアナトリアに新たに流入したトルコマンの動向についてである。實際、モンゴル人の西征の結果、アナトリアへ多くのトルコマンが流入した。彼らはルーム・サルタナトによって西方ビザンツ帝國との境界附近やアナトリアの北部、東南部の邊境へ追いやられたが、モンゴル人のルーム侵攻後、サルタナトの權力が衰えると各地で反亂を起した。そして一二七〇年代以降ルーム・サルタナトに代ってモンゴル人（イル汗國）の直接的な小アジア支配が強まると、トルコマンは Qaraman 家を先頭に度々反亂を起し、モンゴル人と對立した。そして十四世紀にモンゴル人の勢力が後退し始めると、小アジアには Qaraman, Garmiyān などの諸ベイリクが各地に生れ、ベイリク時代が始まるのである。十三世紀の小アジアにおいて新たに流入したトルコマンは來たるべき時代の扉を開く原動力となったという意味で最も重要な役割を演じたと言ってよい。この意味でスュメルが「アナトリアのモンゴル人」の中でトルコマンとモンゴル人の問題を扱ったことは十三世紀の小アジア史研究に重要な貢獻を行なったといえるであろう。スュメルは *Oğuzlar*, Ankara, 1967 や *Kara-koyunlular*, Ankara, 1967 などの著者で、オグズ＝トルコマンの歴史に關する研究の第一人者であり、今後「セルジューク朝歴史・文明研究所」を主宰する一員として活躍が期待される。トルコではスュメルの他 Ali Sevim, Nejat Kaymaz などがルーム・サルタナトに關わる研究に携わっており、セヴィムは一九七二年 Abū Bakr ibn al-Zakī al-Qunawī の *Rawḍat al-Kuttāb wa Ḥadīqat al-Albāb* という史料を校訂して刊行している。セヴィムもまた「セルジューク朝歴史・文明研究所」を主宰する一員である。カイマズは一九七〇年 *Pervâne Muʿīnü'd-Dīn Süleyman* という有名なパルヴァーネ宰相[9]に關する專著を出版した。トルコではオスマン・トゥランのような大家に代って數は少い

が期待すべき研究者たちが現れて來ている。一方、歐米ではカーエンに續いてルーム・サルタナトを取り上げた研究を行なったのは、筆者の知る限りでは Speros Vryonis Jr. 位である。ヴリオニスはビザンツ帝國側のギリシャ語文獻を驅使して *The Decline of Medieval Hellenism in Asia Minor and the Process of Islamization from the Eleventh through the Fifteenth Century*, University of California Press, 1971 を刊行した。ソ連ではゴルドレフスキー以後 H. H. Шенгелия が筆者の知る限りでは二篇の論文を發表した程度である。[10]

ここでモンゴル侵入後のルーム・サルタナトの歴史について筆者の所見を述べておきたい。先ず、以下に當時のルームの政治史を簡單に記しておく。一二四三年のモンゴル人の侵入後ルーム・サルタナトはモンゴル帝國に服屬した狀況に置かれ、そのスルターンたちの運命は初めモンゴル帝國の首都カラコルムで、後にはイル汗國のハン達の許で決定されることになった。一二四五年スルターン、カイホスロウⅡ世が急死すると、當時の宰相（ṣāḥib）Shams al-Dīn Iṣfahānī の盡力でカイホスロウの長子 'Izz al-Dīn Kay-kāwus Ⅱ世が新スルターンに擁立された。彼は當時十一歳にすぎず、サルタナトの國事は專ら宰相シャムスッディーンが掌握していた。ところが一二四六年モンゴルの大カン、グユクの卽位に列席したカイカーウスⅡ世の弟 Rukn al-Dīn Qilich Arslan Ⅳ世は大カンより兄を廢して自らがスルターンに卽位するようにという yarligh（敕書）を得て小アジアへ歸還した。サルタナトではカイカーウスを擁立したサーヒブ、シャムスッディーンが大カンの敕書にあった命令で處刑されたが、結局二人の兄弟は妥協し、末弟の 'Alā' al-Dīn Kay-qubād Ⅱ世も加えて三人の兄弟がサルタナトを統治することになった。カイクバードⅡ世はモンゴルの大カン、モンケの許へ赴く途上で病沒したが（一二五四）、カイクバードの出發後カイカーウスとクルチ・アルスラン兄弟の間でスルターン位をめぐって爭いが起り、カイカーウスが勝利したのも束の間、一二五六年にはバイジュ・ノヤンが再び小アジアに侵攻してアクサライ（Aqsarā）近郊の Sulṭān Khān でルーム・サルタナト軍を破った。カイカーウスはコニヤを捨てて當時ビザンツ帝國の皇帝の居たニケーアへ落ちのびた。バイジュはクルチ・アルスランをルームのスルターンとしたが、バイジュがフラグのバグダード攻略に動員されて小アジアを離れるやカイカーウスがビザンツ側の支援を得てコニヤを奪回するという事態になった。結局、大カン、モンケの命令でサルタナトの領土は二分されて東半分をクルチ・アルスラン、西半分をカイカーウスが統治することになった。二人の兄弟スルターンはその後フラグ・ハンの幕營へ共に出頭したりしたが、一二六一年にはモンゴル軍の強力な支援を受けてクルチ・アルスランがコニヤに入り、カイカーウスはアンタリア（Anṭāliya）からコンスタンティノープルへ逃れた。カイカーウスはその後小アジアへ戻ることなく、ビザンツ領内に監禁されていたところをジュチ・ウルス（キプチャク汗國）のベルケ・ハンに救われ、クリミアに領土を與えられてこの地で生涯を終った。クルチ・アルスランはルームの唯一のスルターンとなったが、カイカーウスとのスルターン位爭いは彼ら一代で終らず、その子供たちの時代にまで持ち越された。クルチ・アルスランⅣ世が parwāna Mu'īn al-Dīn Sulaymān の計略で殺害された後（一二六六）その息子 Kay-khosrow Ⅲ世が卽位するが、一二八四年に

このスルターンが亡くなると新スルターンには父の死後クリミアから小アジアへ來たカイカーウスの子 Mas'ūd II世が即位したのである。以上のように、モンゴル侵入後のルーム・サルタナトの歴史は非常に目まぐるしく變化し、複雑極まりない。諸事件を通じて確實に言えることはスルターンの權威の低下とモンゴル人の影響の増大であろう。こうした十三世紀後半の小アジアの歴史を的確に捉えるためには一貫した視點がどうしても必要である。カーエンやスュメルのようにトルコマンの動きを中心に据えるのは非常に有意義な見方であるが、現在公刊されている史料の中にはトルコマンの動向に關する記述は乏しく、斷片的にしか見出せない。筆者は十三世紀後半の小アジアの政治史を解明する視點はカイカーウス、クルチ・アルスラン兄弟のスルターン位爭いに置けるのではないかと考える。スルターン位をめぐる兄弟間の爭いはルーム・サルタナトの歴史の中で幾度も繰り返されたが、カイカーウスとクルチ・アルスラン兄弟の爭いには以前にはなかった要素が加わり、それだけに爭いの様相も複雑になったと考えられる。その要素とはモンゴル人のルーム・サルタナト内政への介入である。かつてのスルターン位爭いには小アジア内部のダーニシュマンド朝、或いはビザンツ帝國側の介入が時に應じて存在したが、それはつまるところ「地域史」の枠内のことにすぎなかった。ところが十三世紀後半の小アジアはユーラシア大陸を席捲したモンゴル人の手でその運命を決定されたのである。つまり十三世紀後半の小アジアの歴史は單なる「地域史」にとどまることを許されず、否應なしに「世界史」の流れに結び附けられたのである。このような小アジアの狀況を象徴する事件としてカイカーウスとクルチ・アルスラン兄弟の間のスルターン位爭いが擧げられる。たとえばカイカーウスはその生涯をクリミアで終った事實が示すように、以前からキプチャク草原のジュチ・ウルスとの交渉が存在したし、一方クルチ・アルスランは初め大カンのグユク、後にはイル汗國の側からの後押しがあった。さらにカイカーウスとクルチ・アルスランは共に凡庸な人物であったが、ルーム・サルタナトの有力なイラン人官僚が兩派に分れ、カイカーウス側にはシャムスッディーン・イスファハーニー、クルチ・アルスラン側にはパルヴァーネ宰相がついてサルタナトの國政を左右したことやモンゴル人に援助されたクルチ・アルスランに反撥してトルコマンはカイカーウス側を支持したことは兄弟のスルターン位爭いを政治史の一貫した視點とすることで十三世紀後半の小アジアの諸事件を解明する糸口が開けることを示しているのではなかろうか。そして兄弟間のスルターン位爭いは何よりもサルタナトの權威を下落させ、モンゴル人に對する抵抗の力を奪い、セルジューク朝のルーム・サルタナトを滅亡させる最も大きな直接的原因となったのではあるまいか。

以上に述べたように、筆者は今後二人の兄弟のスルターン位爭いを政治史の中心に据えて十三世紀の小アジアの歴史を考察したいと考えている。

III

最後に十三世紀の小アジアの歴史を考察する上で必要な幾つかの史料に觸れておきたい。トルコの有名な歴史學者 M. Fuad Köprülü は "Anadolu Selçukluları Tarihi'nin Yerli Kaynakları"(*T. T. K. Belleten*, cilt VII sayı 27, 1943所載) の中でセルジューク朝

期の小アジア史に關する現地史料を列擧して詳しい解説を加えている。これらの史料のうち十三世紀の小アジアに關する主要なものとして次の三つのペルシャ語史料を擧げることが出來るであろう。

1) Ibn Bibī, *al-Awāmil al-'Alā'iya fī al-Umūr al-'Ala'iya.*

2) Karīm al-Dīn Maḥmūd Aqsarāyī, *Musāmarat al-Akhbār wa Musāyarat al-Akhyār.*

3) 著者不明 *Ta'rikh-i Āl-i Saljūq.*

1)のイブン・ビービーの *al-Awāmil*……はルーム・サルタナトに關する史料として最も有名なもので、すでに一九〇二年 *Recueil de textes relatifs à l'histoire des Seldjoucides* の第四巻として M. Th. Houtsma によりテキストが刊行された。もっともこのテキストは *mukhtaṣar* の名で知られる一種の「要約」をもとにしたものであり、イスタンブルのアヤ・ソフィア所藏の原テキストは一九五六年 Adnan Sadık Erzi によりトルコ歴史學協會（T. T. K）からファクシミリ版で刊行された。[11] 著者は本名を al-Ḥusayn bin Muḥammad al-Munshī' al-Ja'farī al-Rughadī と言うが、その母 Bibī Munajjima がルーム・サルタナトの宮廷で占星家としてよく知られた女性であったためイブン・ビービーと呼びならわされている。イブン・ビービーが自らの父母について語っているところによれば、母親のビービー・ムナッジマはイランの Nīshāpūr、父親 Majd al-Dīn Muḥammad Tarjmān は Jūrjān の出身であるという。兩親共にホラズムシャー Jalāl al-Dīn に仕えていたが、彼の滅亡後（一二三一）ダマスクスへ落ちのびていたところを當時のルームのスルターン、カイクバード一世に乞われてルーム・サルタナトに仕えることとなった。そしてイブン・ビービーの父 Majd al-Dīn は回暦六七〇年 Sha'bān 月（西暦一二七二年三月）に沒したことが史料中で述べられている。[12] アヤ・ソフィア所藏寫本を刊行した Erzi によれば、寫本の作成は、六七九（一二八〇／一）年である。この史料はルーム・サルタナトの歴史を研究する上で最も基本的かつ重要なものである。Houtsma が校訂した *mukhtaṣar*（作成時期は六八一―六八四／一二八二―一二八六）の他、オスマーン朝の Murād II世（一四二〇―五一）の治世には Yazijī-zāda 'Alī によって古オスマン・トルコ語への翻譯が作られた。後世の史家 Munajjim Bashī（一七〇二年沒）の著作 *Jāmi' al-Duwal* のルーム・サルタナトに關する部分はイブン・ビービーが利用されたと考えられる。

2)カリームッディーン・マフムード・アクサラーイーの *Musāmarat*……は七二三（一三二三）年、當時のイル汗國のルーム太守 Timūr Tāsh Nūyan のために書かれたもので、アヤ・ソフィア（七三四／一三三三―四に作成）と Yeni Cāmi（七四五／一三四四―五に作成）に二種類の寫本が現存する。テキストは一九四四年オスマン・トゥランの校訂で T. T. K から刊行された。この史料はスルターン・カイホスロウII世の死後（一二四五）のルーム・サルタナトに關する最も詳しい史料であり、特にイブン・ビービーの *al-Awāmil*……の記述が一二八〇年で終っているので、これ以後に關しては最も重要な史料である。

3)作者不明の「セルジューク朝史」は七六五／一三六三―四年の事件までを記した短い史料で寫本はパリの Bibliothèque Nationale にある。一九五二年トルコの F. N. Uzluk によりこの寫本のファクシミリ版テキストとトルコ語譯が刊行された。

以上、三つのペルシャ語史料の他、十三世紀の小アジアに關する同時代史料としてはバール・ヘブラエウスの「編年誌」*Chronography* が擧げられる。この史料は一二二五—一二二六年小アジア東南部の町マラトヤに生れたキリスト教徒バール・ヘブラエウスによってシリア語で書かれたものである。ドーソンの「モンゴル帝國史」の中でしばしば引用された史料であるが、モンゴル人の事ばかりか、トルコマンやルームのスルターンに關する記述も少くない。テキストと共に E. A. W. Budge による英譯が一九三二年に刊行されていたが、一九七六年に再版されて入手し易くなった。

この他にも小アジア周邊の諸國の史料中にルーム・サルタナトに言及した部分も少くないが、ここでは以上、筆者が利用しうる限りの政治史に關する現地史料を擧げるにとどめる。

尙、最近、清水宏祐氏により Bibliography on Saljuq studies（「イスラム文化研究」十二集・東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所、一九七九）が出された。緒言において氏は將來、寫本類を含めた史料のビブリオグラフィーを編むことを述べており、完成が待たれる。

註

① トルコ共和國の學者たちは Anadolu Selçukluları と呼ぶ。史料中で一般に用いられるのは Salṭanat-i Rūm すなわちルーム・サルタナト（スルターン政權）という表現である。

② この人物の名前については專論がある。Atsız, "Arslan Yabgu'nun oğlunun adı"（*Selçuklu Araştırmaları Dergisi* III. 1971 所載）この中ではアラブ文字 QTLMŠ で表わされるこの人物の名について三つの讀み方の可能性が示されている。私はこのうち從來から採用されている Qut-al-mish（「幸福を取った（者）」の意）の讀み方が最も適當と考える。

③ Isrā'īl と Qutalmish の死については清水宏祐「イブラーヒーム・イナールとイナーリヤーン」（『イスラム世界』十號、一九七五）に言及がある。

④ 十三世紀アナトリア東南部のマラトヤに生れたバール・ヘブラエウスによれば、トルコマンの一老人 Bābā Isḥāq は自らを rasūl（使徒）と稱し、マホメットを嘘つきであると言い、こうした彼の教えはアナトリアの中央部から東部へかけての地域に居住していたトルコマンの間で急速に廣まり、反亂に發展したという。

⑤ この本は後に增補されてゴルドレフスキーの四卷本選集の第一卷に採錄された。B. A. Гордлевский: *Избранные Сочинения*, том 1, Москва, 1960.

⑥ Kerimüddin Mahmud, *Müsâmeret ül-Akbar*（ed.）O. Turan, Ankara, 1944.;（ed.）O. Turan, *Türkiye Selçukluları hakkında resmî vesikalar*, Ankara, 1958.（『トルコのセルジューク朝に關する公文書集』）

⑦ O. Turan, "Selçuk devri vakıfiyeleri I. Şemseddin Altun Aba vakıfiyesi ve hayatı" *Turk Tarih Kurumu Belleten*（以下 *Belleten* と略）cilt XI sayı 42, 1947. "II. Mübârizeddin Er-tokuş ve vakıfiyesi" *Belleten* XI—43, 1947. "III. Celâleddin Karatay vakıfları ve vakıfiyeleri" *Belleten* XII—45, 1948.

⑧ O. Turan "Türkiye Selçuklularında toprak hukuku: Mîri topraklar ve hususî mülkiyet şekilleri" *Belleten* XII—47, 1948. "Selçuk Türkiyesi'nde faizle para ikrazına dair hukukî bir vesika" *Belleten* XVI—62, 1952.

⑨ 宰相 (ṣāḥib) としてルーム・サルタナトで権力をふるったが、一二七七年イル・ハンガの命令で處刑された。十三世紀の有名なイスラーム神秘主義の思想家、詩人 Jalāl al-Dīn Rūmī と親交があった。

⑩ Н. Н. Шенгелия: "Ибн Биби о походе Ала ад-Дина Кейкобада в Грузию" *Мацне* I. 1975; его же, "Участие Армяно-Грузинских войск в Коседагской битбе" *Проблемы Истории Турции*, Москва, 1978 所收。

⑪ H. W. Duda によるドイツ語譯がある。*Die Seltschukengeschichte des Ibn Bibī*, Kopenhagen, 1959 この翻譯は Houtsma のテキストをもとにしているが、脚註などで Erzi の刊行した原寫本なども參照している。

⑫ Ibn-i Bibī, *el-Evâmirü'l-Alā'iyye fī'l-umūri'l-Alā'iyye önsöz ve fihristi hazırlayan A. S. Erzi*, Tıpkıbasım, Ankara, 1956, pp. 442—443.

〔補記〕

ルーム・サルタナトの運命に大きな影響を及ぼしたキョセ・ダグの戰いについては專論がある。

J. Matuz, "Der Niedergang der anatolischen Seldschuken: die Entscheidungsschlacht am Kösedağ" *Central Asiatic Journal* 17 (1973)